

明治大学 リベラル・アーツ フォーラム

第 20 号

グローバル時代における教養教育を考える

巻頭言.....	桑 森 真 介	1
和泉における将来構想について.....	学長 土 屋 恵一郎	2
グローバル化と京劇と「クレヨンしんちゃん」の関係	加 藤 徹	7
和泉キャンパスのこれから — グローバル化推進のために —.....	中 村 成 里	10
「使える外国語」を使わなくなった後に	羽 根 次 郎	15
渾沌を生かすために.....	志 野 好 伸	19
グローバル時代に対応する経営学部取り組み — GREAT: グローバル人材育成と教養教育 —	戸 村 佳 代	24
グローバル時代の教養教育 国際協力人材育成プログラムと 大学の世界展開力強化事業.....	川 島 高 峰	28
既刊目録.....		31

2017 年3月

明治大学和泉委員会

グローバル化と京劇と「クレヨンしんちゃん」の関係

法学部 一般教育主任 加藤 徹

教養教育の本質は、おせっかい、だと思う。つい出しゃばって他人の専門領域に立ち入るとか、学問知識と現実世界の問題を結びつけて余計な世話を焼くとか、そんなおせっかいは、教員にも学生にも必要であろう。紀元前2世紀のローマの演劇作品『自虐者』の登場人物のセリフ

Homo sum, humani nil a me alienum puto.

私は人間だ。人間のことは何でも自分と無関係とは思わない。

に見られる野次馬根性は、適度な範囲なら、教養教育でも有効である。

筆者の専門は京劇である。京劇は中国の伝統演劇で、日本でいえば歌舞伎や能楽にあたる。こと演劇に関していえば「グローバル化」の波は20世紀初頭から始まった。

京劇の名優・梅蘭芳 (Mei Lanfang 1894-1961) は1919年の日本公演を皮切りに、アメリカやソ連で海外公演を成功させたが、京劇の舞台芸術の暗黙知的なコンセプトは、世界の演劇人に影響を与えた。例えば、ドイツの劇作家ブレヒト (Bertolt Brecht 1898-1956) は、京劇の俳優や、アーサー・ウェイリーによる能楽の脚本の自由訳 *The Noh Plays of Japan* (1921) からヒントを得て、独自の演劇理論を構築した。ブレヒトの理論は世界各国の文芸界に影響を与えた。例えば、日本の演劇人である千田是也 (1904-1994) は、梅蘭芳と親交をもつと同時に、ブレヒトの演劇作品や理論を日本に紹介した。千田の門下生のなかには、ブレヒトを通じて京劇研究を始める者もいた。比喩的に言うと、京劇の世界への伝播の中で、梅蘭芳の日本公演という東まわりのルートと、ブレヒトという西まわりのルートは、日本で再度、出会ったということである。

京劇という伝統劇さえ、20世紀以降は中国以外の国や地域も射程に収めねば全体像がつかめなくなる。

また京劇は、「文化大革命」の導火線となった新編歴史京劇「海瑞罷官」や、文革中の革命模範京劇などが著しい例であるが、政治的にも利用されてきた。京劇以外の専門分野に立ち入る野次馬根性がないと、京劇について教養教育で教えることは難しい。

このように、アナログ時代だった20世紀でさえ、グローバル化は進んでいた。まして21世紀の今日、世界の一体化はますます進んでいる。その結果、例えば「日本の子供むけのアニメが、外国の民族独立運動の刺激になる」という現象も起きるようになった。

スペインにカタルーニャという自治州がある。州都のバルセロナはヨーロッパ有数の都市である。サッカーのファンのあいだでは有名な挿話だが、日本の漫画・アニメ作品の「キャプテン翼」は世界中で人気があり、プロのサッカー選手にもファンが多い。主人公の翼は架空の日本人だが、原作では、FCバルセロナに入団する。スペインのファンは喜んだ。実在のFCバルセロナでは入団式を行い、翼を正式のメンバーとして認めた。一方、ライバルチームのレアル・マドリッドの会長は残念がり「なぜ翼をうちに入れてくれなかったのか」と発言した。

日本アニメの人気は世界的だ。その影響力は、あなどりがたい。

カタルーニャ州では、2010年代に入り、スペイン中央政府からの独立運動が盛んになった。原因の一つはスペイン語とカタルーニャ語の違いにある。スペイン語は全世界で4億数千万の話者人口をもつ。カタルーニャ語の話者人口は数百万だ。市場規模が小さいため、テレビのドラマや映画はスペイン語ばかりになる。カタルーニャ州では、大人はともかく、就学前の子供は母語のカタルーニャ語しかできない。スペイン語のテレビを見てもわからなかった。

例外は日本のアニメ作品だった。カタルーニャ州のテレビ局も、日本のアニメ作品の放送にあたっては、子供が理解できるよう、カタルーニャ語に吹き替えた。

その中に「クレヨンしんちゃん」というギャグ作品があった。主人公は日本の幼稚園児である。カタルーニャの子供たちは、自分と同じ言葉を喋る登場人物たちのドラマに、目を輝かせて見入った。子供は面白いもの、楽しいものが好きである。作品の国籍は関係ない。

時は流れ、子供たちは青年になった。カタルーニャ独立運動が起き、参加者60万人とも200万人とも言われる大規模なデモの人波が、街を埋め尽くした。かつての子供たちもデモに参加した。そのプラカードには「私たちはアニメからカタルーニャ語を教わった」という言葉や、「クレヨンしんちゃん」の主人公である幼稚園児が描かれていた。この主人公の普段着は、赤色のシャツと黄色の半ズボンだ。赤と黄の配色はカタルーニャ独立旗と同じだ。

19世紀のフランスでは絵画作品でも有名な「民衆を導く自由の女神」が7月革命の象徴となったが、21世紀のヨーロッパでは日本アニメのキャラが民族独立の象徴になる。

グローバル化とは、そういうことだ。

昔の学校教育では、東洋と西洋とか、ハイカルチャーとサブカルチャーとか、そんな垣根を設けていた。しかし現代は、「クレヨンしんちゃん」がヨーロッパの独立運動に刺激を与え、ボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞する時代だ。昔ながらの垣根は、どれほどの意味をもつだろうか。

教養教育を担当する教員も、受講する学生も、意識を改める必要があるかもしれない。

思えばかつての京劇も、20世紀初頭までは大衆的な芸能だった。梅蘭芳がデビューしたころは、通俗的な娯楽として、京劇は中国の知識人から低く見られていた。しかし近代化の荒波にもまれるうちに、京劇は外国へと飛び出して外国で高い評価を受けた。その影響が中国に逆輸

入されたことも一因となって、京劇は中国の「国劇」に格上げされた。21世紀の今日、京劇はユネスコの世界文化遺産である。

浮世絵も京劇もアニメも、地球を一周することで、俗な言い方をすると「大化けした」のである。

筆者は教養の授業で、ときどき京劇を取り上げる。もともと民衆の娯楽だった京劇は、さまざまな力学が働いた結果、近現代の中国において「国民意識」の起爆剤として利用され、良くも悪くも発展を遂げた。その経緯を説明するとき、話の補助線として、アニメ「クレヨンしんちゃん」とカタルーニャ・ナショナリズムの事例を紹介する。留学生も含め、今の大学生・大学院で「クレヨンしんちゃん」を知らない者はいない。

京劇やアニメのような浮世離れした娯楽文化が、社会を変える大きな潜在力をもつという事実、自国ではさして注目されない文化や作品が海外で受容されるとしばしば「外来生物」のような猛威を発揮するという事実、学生は興味をもつようである。

「自分の専門は〇〇だから」とか「自分はもういい歳だから、若者の文化はわからない」という言い訳は、教養教育の担当教員には、なじまない。

古代ローマの芝居に出てくる野次馬の老人のセリフ

「わしも人間じゃから、人間のことはなんでも自分と無関係とは思えんのよ」(前出の意識)は、グローバル時代の教養教育においても、示唆的である。

(2017-1-25)